

還らぬ親父と酒を

諏訪市大和 竹田 静男

ル」で、軍隊内では老人らしい。年齢は四十二歳。いよいよ戦況が予断を許さない状況になったと、子供心にも緊張感が湧いた。真偽の程は不明だが、関東軍の精銳が南方に移動したため、戦況不利のソ満国境守備の補充兵であつたらしい。

「欲しがりません勝つまでは」と、もう一本の垂れ幕を、満州国遼陽市の大通りの建物に、朝に夕に遼陽小学校の登下校時に眺めていた。しかし戦況が想像以上に悪くなつているとは！ 日頃ラジオなんて、そして学校でも好き事ばかり伝えていた。下校すればカバンを放り出し、遊ぶことに熱中するのが子供の性であつたが、まわりには年頃の友達がおらず、専ら隣の本屋で目の落ちるまでむずかしい字と格闘していた。本屋の親父さんはお客様が少ないし、私を「サクラ」のつもりで目認して下さつていたので、私としてはうんと嬉しかった。字に親しむ下地は、この時に芽生えたように思う。本屋の親父さんには満腔の感謝の言葉を捧げたいが、今ではおそすぎる。でも、深く深くありがとうと声を大にして捧げます。のどかな日々でした。今から振り返れば。

突然、子供の私に異変が訪れた終戦の年の五月に、父親に赤紙がきた。兵役の位では第二国民兵の「ロート

ソ連軍が間も置かず我が街に進駐して来た。噂が駆けめぐり、女性達は命より大切な緑の黒髪をザックリと切り落し、坊主頭になつた。それでもソ連兵達は乱暴な狼藉の限りをつくした。それが許されざる行為であることは自明の理であるが皆口を閉ざして知らんぶり。

ある時突然、「ロスケ」がカラシニコフ銃をかざして、ノックもせず我がアパートに侵入して来た。ワカラナイ言葉で喚いて、各部屋を傍若無人に土足で荒らし廻つた。そして私達の部屋に入つて来るなり、一人のロスケがやおら自分の腕を挙げて、腕に巻いた時計を四ツばかり誇示した。おそらく差し出せとの意思表示だと思つたが、無い袖は振れない。兵達は手当り次第に抽出しや戸棚を物色したが成果があるはずがなかつた。

半年前に弟が罹病し、お医者に手当てをお願いしたが、八方手をつくして探しても薬が入手出来ず、先生は何もおっしゃらず頭を下げるばかりであつた。杏の實の熟れる候に、弟は冥途に旅立つた。その骨箱の白い布をソ連兵達は荒々しくほどき机の上に弟の骨を打ちまけたのだ。目的の物が無いと解るや手も合わせず、頭を垂れる所作もせず立ち去つた。言語道断、無知蒙昧。私達家族は茫然として言葉も無かつた。形容しがたい屈辱が全

数日後、下校したら、家の中に父親の送別の宴の名残りがあつた。木の「タライ」の中に液体が残つていたので、そつと隠れてコップで口に流し込んだら、何とも形容しがたい苦味のある異な味がした。成人して懐に余裕があつて、生ビールをささやかに嗜む時には、ふと亡き父の面影と、當時を想起し、なお斗酒辞せぬ今の我が在るのは、亡き親父への挽歌かも。

父が北滿のジャムスの北の任地に赴任して武器を渡されたのが、木銃であつたという。むべなるかな、父は敗けるのを覚悟していたのかと、私は子供心に感じた。今でも未来でも、変わらないその親父の悲しい淋しい心境が思い起こされる。

ソ連は戦況を見ながら、日本との条約を反故にして滿洲に侵攻して来た。火事場泥坊のソ連。日本軍は抵抗の術もなく敗退せざるを得なかつたと思う。口惜しいのが事実であつた。戦は勝たなければ……

身を走つた。忘れきれない出来事である。

日本の国に住んでいる今、表面で平和な生活でいられるのは、過去において自分の意志を押し殺しても国策に従わざるを得なかつた時代の人達に私達は心から感謝すると共に、再び人間が人間を殺し合うことは絶対に起こしてはならないと考える。今の自民党は小泉から安倍に変わり、ますます右傾化している。戦争を知らない者どもが、日本をますます駄目にしようとしている。

日本の将来を考えると安眠出来ない。

今宵もひとときの平和を、親父と弟とで「真澄」をくみ交わそう。
(初田静児)

